

- ① …「第16回埼玉県第4種サッカーリーグ」開幕
東京国際大学FC、善戦及ばず ～「天皇杯JFA第102回全日本サッカー選手権大会」開幕～
- ② …日本の審判の現状、埼玉に望む方向性 ～黛俊行・前JFA 審判委員長に聞く～
- ③ …日本の審判の現状、埼玉に望む方向性 ～黛俊行・前JFA 審判委員長に聞く～
- ④ …沼澤秀雄氏(立教大学教授)に聞く、若年層に向けたフィジカルトレーニングの今
- ⑤ …「第4回埼玉フットボールカンファレンス2022」開催
- ⑥ …大会記録●県内大会 1種社会人・2種高体連・女子・高体連・フットサル
- ⑦ …大会記録●県外大会 2種・高体連・4種・女子・シニア
- ⑧ …大会記録●県外大会 2種・高体連・4種・女子・シニア
- ⑨ …インフォメーション 編集後記

●発行/(公財)埼玉県サッカー協会 〒330-0074 さいたま市浦和区北浦和1-21-18 雁ヶ音ビル204号室 Tel 048-834-2002・Fax 048-834-2004 <https://www.saitamafa.or.jp/>

「第16回埼玉県第4種サッカーリーグ」開幕

今年で16回目を迎える「埼玉県第4種サッカーリーグ」が、4月9日から県内各地で開幕しました。今回は449チームが参加し、52ブロックに分かれて熱戦が続いています。今年も新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、会場によっては観戦ルールが異なります。ルールを順守してご観戦いただきますよう、よろしくお願いいたします。



東京国際大学FC、善戦及ばず ～「天皇杯JFA第102回全日本サッカー選手権大会」開幕～

5月21日、「天皇杯 JFA 第102回全日本サッカー選手権大会」の1回戦が行われました。埼玉県代表の東京国際大学FCはソニー仙台FC(宮城県代表/JFL)と対戦し、アディショナルタイムで小島匠選手が1点を返したものの、1対3で敗れました。

なお、ソニー仙台は埼玉県出身の内野裕太選手(武蔵野FC～志木アクセルFC～県立朝霞高校～拓殖大)が2得点と活躍しました。



東京国際大学 FC



東京国際大学 FC vs ソニー仙台 FC

日本の審判の現状、埼玉に望む方向性

～ 黛俊行・前 JFA 審判委員長に聞く～

昨年度いっぱいをもって、JFA 審判委員長を務められた黛俊行さんが退任をされました。本来ならば、就任された時点でお伺いするべきではありましたが、退任という時点でのインタビューとなり、大変失礼しました。黛さんといえば、浦和西高校時代、西野朗さん(元日本代表監督)の同級生としても知られていますが、埼玉教員クラブの一員として日本サッカーリーグ(JSL)2部でもプレーし、JSL、Jリーグでも審判活動をされてきました。そして今もなお、審判養成のトップランナーとして活動を続けられています。その思いの一端をお聞きました。(聞き手/広報委員 荒川裕治)

コロナ禍における過酷な審判活動

—まずは、二年間の大役、お疲れさまでした。「たったの二年ですか?」という感もありますが、とにかく世界中が大変な二年間を過ごされたと思います。もう JFA に入職されて、ずいぶん長くなりますね。

黛 2007年、52歳のときでしたから、15年になります。今回、委員長を降りましたが、たまたまその時の諸事情から年齢の問題もあり2年間という約束で2年前に就任することになり、この時点で若い人に譲ったということだけです。もういいでしょう(笑)。

—降りられても、まだまだ仕事は続くとのこと。そのお話はのちほどとしまして、この二年間を振り返っていただけますか。こちらとしては「ぜひインタビューを」と思っていたら新型コロナウイルスの感染で、ままたまなくなりました。

黛 こちらも同じです。コロナ対策に明け暮れた二年間だったと言ってもいいかもしれません。多くの活動がストップしてしまい、特に育成の大会ができなくなり……それでも、地域によって社会人リーグが動き始め、Jリーグも JFL もと無観客ながらも試合を始めました。

そこで審判ですが、全員がプロフェッショナルレフェリーならばいいのですが、実際はそうではありません。他に仕事を持ったレフェリーが大半なわけですね。彼らが活動するにあたり、職場の理解、家庭の理解は不可欠でした。地方に行けば、地域コミュニティが根強いのですから、審判活動をしていたらわかってしまうわけですね。もちろん、家族から「お父さん、行かないで」という声も出る。レフェリーにとっては、厳しい状況になりました。ましてや、審判活動をして感染でもしたら、とんでもないことになってしまいますからね。

埼玉でも、審判割り当てを担当された皆さんは、本当にストレスを抱えられたと思います。「こんな状況でも審判をしなければいけないのか」と。実際、今でも審判担当を当日キャンセルする方もいらっしゃいます。それはそれで仕方のないことで、ただその中で試合運営をしなければならぬ、「なんとかしなきゃいけない」という皆さんに支えられた二年間だったと思います。

Jリーグを見ても、現在208名の担当審判が登録されていますが、ほとんどが仕事を持ちながらです。さらに VAR を導入しましたから、その稼働はまさに過酷でした。

—改めて、審判の皆さんには頭が下がる思いでいっぱいです。

黛 日本のスポーツ界全体の仕組みとして、審判活動に従事している方の中には、社会体育を支えてくれる公務員の方々が多いことも事実としてあります。本当にありがたいと思っています。現在は公務員の方は兼業申請の関係でプロリーグの審判活動をするのが難しい環境になってきています。

—そのためにも、審判活動への理解をもっともっとうしていただけるよう、努力していかねばなりませんね。埼玉でいえば、県全体で審判をリスペクトしていこうという機運を高めていく必要があります。そういう面で、もっとご教授いただきたいものです。

さて現在も、委員長職は離れながらも、まだ籍を置かれていて聞かれています。

黛 JFA 審判マネージャーとして、トップレフェリーの評価を行っています。具体的にいうと、6名いるビデオアシスタントの統括です。J1はこの6名の方が試合を分析して、担当審判に関する評価を行って

います。そのほかに、J2、J3、ルヴァンカップのすべての試合については、6名以外のアセッサーの皆さんからあげられたキーインシデント(事故に繋がらなかった事件/ミス)の分析、評価を行って評価にフィードバックしていただく仕事をしています。評価することは、非常に難しい仕事です。常に分析する上での考慮点や評価の観点について、しっかりとブラッシュアップをして、正しい評価につながるよう努力しています。

グラスルーツの審判は足りていない

—なかなか、評価をするのは難しいのではないのでしょうか。

黛 Jリーグではカメラは16台ですが、プレミアリーグ PGMOL (プレミアリーグやフットボールリーグなどの審判に関する独立組織「Professional Game Match Officials Limited (PGMOL)」)は最大34台のカメラで試合を観ています。一つの場面でもアングルを変えて撮影していますから、判断する上でのエビデンスも拾えるようになっていきます。プレミアリーグの審判員評価者はタブレットを使って判定の正誤を入力することで自動的に審判評価ができる仕組みになっています。日本では、VARにおいても映像が足りないことがあります。ですから、オートマチックな評価ができるまでには至っていません。

—VARのジャッジについては、ようやく慣れてきたところですか。ただ、J1だけということもあり、次第に下のカテゴリーでも要望されることになるのではないのでしょうか。

黛 PK や DOGSO (決定的な得点の機会の阻止) など、いろいろとわかりやすくなったのは間違いありませんが、それでもグレーゾーンはあります。

またオフサイドに関しては、VARは主審の判断の前に検証することが仕事です。ちなみに、VARはFIFAからインストラクターがやってきて指導を受け、認定を受けるのですが、資格取得に一定期間のシミュレーショントレーニングと実際のプラクティカルトレーニングを積み必要があり一人あたり資格取得にかかる費用は100万円を超えます。また、この資格取得はJ1担当審判員のための条件にもなっています。

—スタジアム内にVAR用の車を用意するなど、クラブだけではなくてもできない整備事項もあるとお聞きしています。広がっていくには、まだまだ課題がありますね。

さて現状、Jリーグを担当する1級審判は足りていないのでしょうか。というのは、以前ならば、関東リーグは2級の皆さんが担当されていたのが、時折1級の方々も見受けられるようになりました。

黛 JリーグがJ3までできましたが、実際のところは、審判員の強化を考えた時に、適切な割り当て数を考える必要があり、人数の上限はありますね。また、環境によって個人差はありますが、現在年間約30～35試合以上の担当していただいています。強化につなげるためには必要な割当数と考えています。

Jリーグをはじめとしたトップリーグを支える審判員の質と数を考慮して、2019年から1審判員の認定審査の方法を変えました。以前ならば、地域協会(埼玉であれば関東)から推薦してもらい、JFAで審査していました。これを「JFL主審候補者プール」と言って、地域とJFA協働で二年間かけて強化並び審査することにしました。

—1級に関しては、足りているという認識でよろしいのでしょうか。

黛 人数的にはトップの審判は足りているという状況です。質的な部分の向上はさらに図っていく必要はあると思います。とはいえ、コロナにより割当受けることが難しい審判員が多く出た時は大変な時期がありました。グラスルーツを支える審判の絶対数は足りてい



黛 俊行氏

ないと思います。

SFAも、これからは審判が必要な試合、そこにどれだけの人材(2級~4級)が必要なかを割り出して育成・強化をしてほしいと考えています。これは、SFAの審判委員会でも議論されていると思いますが、審判数が多くても、実際に活動してくれる審判員数が少なくても高いサッカー環境を担保できないと思います。ですから、県で割当を行う試合数とそこで求められる審判レベルと数といった、明確な数値目標が必要だと思います。

最近では、女子の試合のリーグ戦が増えていると思います。急に「審判お願いします」と言われても、足りないのが実状です。また今年からプレミアリーグ(高宮宮杯)の試合数が増えましたが、やはり実践となる試合がないと、選手同様、審判も育てられないのです。試合数を増やすことは望ましいことですが、計画的に審判員も育成強化していく仕組みがないと試合環境は整わないと思います。

—具体的にご提案があればお願いします。

黛 県としてではなく、4地区で育成・強化をお願いしたい。私が知らないだけで、すでにあるのかもしれませんが、そのための組織を作ることはできないのでしょうか。もちろん予算も必要でしょう、人材も必要でしょう。埼玉には1級審判を引退された方が多くいらっしゃいます。そういう皆さんに、審判指導者を育てるお手伝いをしていただき、また実践から離れている資格保有者の皆さんを育成してほしいですね。もっとグラスルーツを支える審判を育ててほしいです。

現実的に、活動していただいている審判の皆さんは、自己投資をして研鑽していらっしゃいます。審判フィーをいただいても、実質は赤字。それなのに試合で文句を言われて、となると、将来的に誰も審判をやりたいがらなくなってしまいます。それでは、サッカーの試合が成り立ちません。

—やはり、審判へのリスペクトをどう持てるかどうかですね。

黛 審判はやはり難しいです。一つひとつの事象の判断もそうですし、ゲームマネジメントという面でも難しい場面はたくさんあります。トップレフェリーはVARなどで情報を得ることができるようになりましたが、それ以外の99%以上の試合環境では審判員がすべての決定をしなくてははいけません。難しい環境で頑張っている審判員に対して、未だにSNSには残念な投稿が多いのは事実。サッカーだけでなく、スポーツの世界全体として審判に対してのリスペクトをお願いしたいと思います。

ただ、審判には最終的な責任が任せられています。試合を壊さないマネジメントをお願いしたいと思います。

この数年間の中で、レイさん(レイモンド・オリヴィエ。イングランド出身の元審判員。JFAに審判指導のために赴任)から「フットボールの考え方」を教わりました。

「ノーマルフットボールコンタクト」という考え方

—その「考え方」を教えてください。

黛 それは「ノーマルフットボールコンタクト」。サッカーで起こりうる接触プレーで、ファウルとしない接触のことです。サッカーは接触が許されるスポーツですから、単に接触があって相手が倒れたからファウルということにはなりません。

そんな中で私たちはどうしても同じ定義でしか考えないのが残念なのです。「あの試合とこの試合、ジャッジが違うじゃないか」と。でも、それも含めて「サッカーなんだ」と思ってほしいのです。事象によっては白黒つけられないものもあり、それを審判員は判断しているわけです。

これこそがゲームエンパシー(試合に共感する力)だと思うのです。逆に審判にはこういう配慮ができないと困るのです。ファウルに対して、カードをレッドにするのか、イエローで留めるのか、競技規則に則るのは当然ですが、その前提に立ったうえで、なおかつ試合の空気感を感じて判定を下す。感情移入するように、レフェリーが「試合そのものに移入」する必要があるという考え方がレイさんによって持たされたことは、日本サッカー、審判員の大きな変化につながっていると思います。

例えば、ローカルな試合でスカウティングのビデオをチームから借りて確認することがありますが、正直わからないことは多々あります。なんとかコマ送りして確認したところで「これファウルにする？」



(いや、しなくてもいいでしょう)なんてこともあるでしょう。ならば、現場の審判を支持したほうがいいのではないのでしょうか。

先ほどの「ノーマルフットボールコンタクト」の考え方と同じです。サッカーをしているのですから、足と足がぶつかるのは必然的なことです。育成年代において、「笛が鳴るまでプレーしよう」と指導することの成果は大きなものがあると思います。

一人審判についても「受け入れよう」という流れになっています。

—しかしながら、4種の現場からは一人審判については不評ですね。やはり副審もいてくれないと困るという声や、三人いてもミスが多いという声が聞こえてきます。

黛 「笛が鳴るまでプレーを続けよう」ということが、定着化したように思います。

4種は8人制になりました。この変更により、まずGKが変わりましたね。オフサイド等のカバーリングが求められるようになり、守備範囲が大きく広がったこと、足でボールをプレーすることの機会が増えたことは大きな変化です。また一人ひとりボールを触る回数は劇的に増えましたし、切り替えの早さ、判断の早さも出てきています。これらは、環境に適したプレーが求められていることからです。

審判員も同様で展開を読んだ素早い動き出しから適切な距離やアングルを探して判断する。もちろん一人のために見えなかったり、判断できないこともあります。こういったことを受け入れながら共に成長する環境を作り出すことが大切だと思います。おっしゃる通り、三人制だってミスはします。ただ審判のミスを少なくすることが、子どもたちの強化・育成につながるのかどうか、なのです。

そこは指導者の考え方一つです。8人は自由な交代が認められています。勝つことにこだわることは子供たちにとっても大切なことです。しかし、勝ち負けにこだわるあまり交代せずに終わってしまう。それでいいのでしょうか? やはり指導者の考え方なのかなと思います。

いずれにしても、全国的には成果が上がってきています。ただ、県レベル、市町レベルでは理解がまだまだ不十分です。すべて一人審判員でということではなく、適用範囲が広がることで選手にとっても、審判員にとっても良い結果につながると思います。

—啓蒙は必要だと思います。特に「勝負」か「育成」か、という部分には、問いかけをしていかなければならないと感じています。それは4種に限らず、3種でも、2種でも同様でしょう。成長できる場が無ければ、やはり成長はしないのですから。

黛 そうです。審判も同じですね。成長ができる場があるかないか。そのためには、「バトンタッチ」が必要なのだと思うのです。

審判員がチャレンジできる環境整備を

—「バトンタッチ」ですか。

黛 まずは上に立つ人です。よく「人材がない」という声を聞きますが、いないわけではないのです。いるはずなのです。ただ、前任の方々も長期間その場にいらっしゃると手放すのが難しいのでしょうか。いなければ育てる覚悟をして、育てながら人を回していくことを考えなければなりません。選手育成と同様、失敗を覚悟して場を与えないと成長しないのです。バトンタッチができないと、次世代の発掘、育成、強化が止まってしまうのですから。

また、失敗させない、文句を言われなくすることは大切ですが、それにこだわるあまりチャレンジすることを諦めてしまうことは選手や審判員にとっての成長を阻害することになります。特に女子の審判が育たないのはこんなところに要因があるように思います。よく女子の関係者の皆さんが「(審判は) 男性でいいですから」とおっしゃるのですが、それでは女子サッカーそのものと、女子審判員の育成や強化は頭打ちになってしまうと危惧しています。

—そういう面では、戸田市 FA の女性審判の育成事業は特筆すべき新規事業ではないでしょうか (111号参照)。

黛 そうですね。4級を取ってもらうことが目的のようですが、まず競技規則を覚えていただき、キックオフはどうすればいいのか、PKになったらどうすればいいのかなど、機会を与えてあげないと実際にはできないものです。それもまた、ミスはするでしょう。しかし、そのミスをお互いが認められる環境を作らないといけないと思うのです。

女子の話でいえば、国体で女子のU-16が始まります。この場でも「女性審判と一緒に育てていきましょう」という話を技術委員会の方からいただいています。でも試合になれば、審判に完璧を求めるのではないのでしょうか。確かに勝敗を決める大会ではありますが、選手と同様に失敗を重ねながら、能力のある人、意欲のある人を引き上げていきたいと考えているのです。全中も、1級候補の女子派遣を認めていただきました。いろいろ問題はあったでしょうが、やり続けたことで成果は出ています。(注・FIFAは11月に開幕するワールドカップカタール大会の担当審判員を発表し、日本から主審候補として山下良美さんが入った。ワールドカップで女性が審判員に選ばれたのは史上初で、今回、山下さんら主審3人と副審3人の計6人の女性が名を連ねた)

—認めるというか、任せるといふか。ただ、選手も審判も、試合の中で育てていくということですね。

黛 それを指導者がどのように認識しているかです。育成年代を育てているという指導者がいたとして、「結果を出さないとクビになってしまう」というのであれば、そういう指導者に教えられてうれしいのでしょうか。勝つこと、勝つことにこだわることは育成の環境でも大変大事です。でも、出た結果を受け入れられることもそれ以上に大切だと思うのです。

日本のサッカーは昨年100周年を迎えました。審判に関しては発展途上だと思えます。もう一步進めるためにも、やはり環境づくりです。ゲームエンパシーを含めて「フットボールってなんなんだ」という理解を深めていく必要があります。

そのためにも、審判を育てる指導者は必要です。世界のサッカーは常に進化し、高いレベルの技術、それをいかした戦術、スピード、強いフィジカルとコンタクトプレーで展開されています。審判としては常にその進化に対応できなくてははいけません。また、その先を目指していかなければならないのです。近い将来、審判の指導者養成も、技術委員会の指導者養成のようになっていくことでしょう。

いずれにせよ、若い世代の審判が、またグラスルーツでは多くの審判が活躍できる環境を作っていきたいものです。先ほどの繰り返しになりますが、有資格者の皆さんがチャレンジできる場、チャレンジすることができる場を埼玉から作っていただきたい。そのサポートをしてくれるのが、引退した1級審判の皆さん、いや現役の1級審判員でもいいのです。チャレンジしたいという人たちがトップレベルに触発されて、より審判に対しての理解を深めて、それぞれのグラスルーツの現場でがんばっていただけたら幸いです。

埼玉の取り組みを楽しみにしています。あっ、ちょっと言い過ぎましたか(笑)。

—いえいえ。取り組みに関しては、審判委員会の木村委員長に期待しております。JFAからもぜひ適切なサポートをお願いいたします。そして、改めてですが審判委員長として、お疲れさまでした。これからもよろしくお願いします。本日はありがとうございました。

沼澤秀雄氏(立教大学教授)に聞く、 若年層に向けたフィジカルトレーニングの今 ～第二次成長期だけでなく、プレ・ゴールデンエイジから～

このところ、各カテゴリーの指導者からフィジカルトレーニングの重要性を聞かされることが多くなりました。それも、異口同音に「高校年代からでは遅い」と。そこで今回は、技術委員会の普及・育成部長でもある柏悦郎コースダイレクターと、新任の山崎茂雄 FA コーチと共に、立教大学にお伺いしました。今回のインタビューは、コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科教授である沼澤さんと、山崎 FA コーチは大学時代の同級生ということで実現しました。(聞き手/広報委員 荒川裕治)

「無理をさせない=何もしていない」からの変革

—今日はお時間をいただき、ありがとうございました。さて、古い話で恐縮ですが、Jリーグ開幕当初、浦和レッズのフィジカルコーチをされていましたね。

沼澤 はい。私の恩師である澤木啓祐先生(元順天堂大学スポーツ健康科学部学部長、元日本陸上競技連盟専務理事)から「サッカーの現場で勉強してこい」と言われたのがきっかけです。

そもそも、レッズの初代の監督である森孝慈さん(故人)が、一年間ドイツ留学をされていた際、陸上競技を引退した選手がブンデスリーガのクラブのコーチになって、フィジカルを専門的に指導しているのを知ったそうです。森さんから澤木先生に相談があり、最初の四年間でしたが、週に1回を指導しました。その縁があって、JFAのフィジカルフィットネスプロジェクトに声をかけていただきました。

—昨年度から、そのプロジェクトによって「JFA フィジカルフィットネスライセンス」がスタートしましたね。また、その話はのちほどお願いします。



沼澤 秀雄氏

さて、今回は4種年代、3種年代に向けてのフィジカルトレーニングについてお聞きしたいと思っています。というのは、このところ2種年代の男子の指導者、女子の指導者に関わらず「2種でフィジカルトレーニングに取り組もうと思っても、もう遅い」という声を頻繁に聞くようになったからです。若年層の指導の中で、「あまり負荷をかけすぎはいけない」と学びました。ただ、個体差があるでしょうから、一概ではないと考えています。では、子どもたちの何を、どこを見ておけばいいのか。そのポイントをお聞きしたいと思っています。

沼澤 その「JFA フィジカルフィットネスライセンス」の関係もあり、最近までJFA アカデミー福島の中学一年生を週に一回、御殿場で指導していました。「ランニングコーディネーショントレーニング」として、オフ明け、火曜日の夕方に行っていました。アカデミーに入ってきたところで、フォームづくりを中心に指導しました。

そこで思ったのは、小学生の低学年から高学年、いわゆるゴールデンエイジに「いい走り」、「いい動き」ができるようになってほしいということでした。

確かに今までの考えでは、中学年代には成長期ということ、オズグッドなどの予防の見地からもあまり無理をさせないという方向でした。しかし、ここに来て同じフィジカルフィットネスプロジェクトのメンバーである小粥智浩さん(流通経済大学/U-17日本代表フィジカルコーチ)が「世界はどうか?」と調べたところ、成長し切ってからトレーニングをしていたのでは、間に合わないのではない

かという考えを示されました。

心配なのは「無理をさせない＝何もしていない」という状況になっていないかということです。やはり、その年代、個人に合わせたトレーニングが必要ではないかということで、JFA アカデミーでは中学一年生から三年生まで、週一回「総合的フィジカルトレーニング」を行っています。ですから、今は積極的なフィジカルトレーニングをしていこうという方向になっています。

PHVで平易にチェック。タイミングを逃さない

—整理すると、アカデミーに入るような選手でも、中学生年代で改めて走りのフォームを矯正しないといけないくらいなんです。そのためにも、ゴールデンエイジにもう少しトレーニングをしていく必要があるということです。

沼澤 そうなんです。前後しますが、先に中学生年代の話をおきますと、何もしてなくても体が大きくなる時期でもあります。ただ、その時期に何も刺激を与えないと「それなり」になってしまいます。NHKの「みんなで筋肉体操」のキャッチフレーズではありませんが「筋肉は裏切らない」んです。正しい刺激を与えると、しっかり反応してくれるのです。

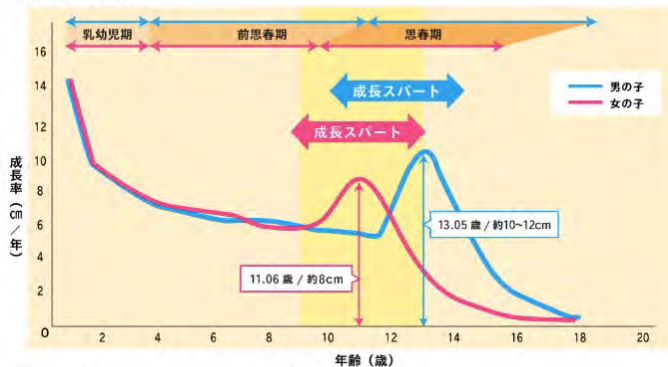
ただ、年代・年齢に応じて、というのが難しいです。やはり個人差があり、中には2歳程度違うことがあるのです。やはり、第二次成長期を理解した上で個人に合わせた負荷が必要になります。

先ほど「見るポイント」という話がありました。その指針として、PHV (Peak Height Velocity) の観察を推奨しています。

—そのPHVというのは、どういうものなのでしょう。

沼澤 PHVというのは、身長伸びのピークのことです。まったく難しいことではなく、月一回身長を測ればいいのです。だいたい10歳から14歳の間で、測ってもらえればいいと思います。具体的には、身長伸び率を調べます。第二次成長期にはグンと身長が伸びることがありますが、そのピークは当然あって、徐々に下がっていくものです。要するに、まだ成長を続けるのか、それともできあがるのかという状態がわかればいいのです。このできあがるかどうか、というタイミングを見逃したまま何もしていないと、いい時期を逃してしまうと考えています。この時期にこそ、適切なトレーニングを行い、最大筋力や瞬発力を向上させてほしいのです。

身長伸びの変化



※思春期の成長スパートは開始年齢が人により4~5歳異なります。
参考：平成12年乳幼児身体発育調査報告書（厚生労働省）及び平成12年度学校保健統計調査報告書（文部科学省）

—なるほど。合わせて、選手一人ひとりをしっかり見ることも必要だということですね。

沼澤 そうです。一人ひとり、発育・発達スピードは異なりますからね。

一方で、その時期には神経系の成長はできあがっています。神経系はご存じの通り、5~6歳で90%ができています。一般的にはゴールデンエイジが大事だと言われていますが、その前のプレ・ゴールデンエイジの時期にいろいろな動きを覚え込ませることが重要で、その経験が即座の習得に結びつきます。したがって、サッカー以外のスポーツや動き、例えば水泳や木登り、坂道を駆け下りたりするという遊びの中で、バランス感覚や調整力を身につけていくのです。これらもコーディネーショントレーニングといえます。

さらに言えば、これは今回冒頭にもあった「JFA フィジカルフィットネスライセンス」のC級、A級U-12のコーディネーションを担



当されている泉原嘉郎さん（九州産業大学）によると、ドイツではコーディネーショントレーニングは子どもから年配の方まで共通しているものとおっしゃっています。サッカーが上手くない方も、代表選手でも「やり続けるべきもの」と提言されています。

コーディネーショントレーニングは伸びしろ

—コーディネーショントレーニングそのものの考え方が違うのでしょうか。

沼澤 日本でコーディネーションというと、筋力であったり、調整力、柔軟性、持久力などと同じように体力要素とされているのですが、ドイツでは違う考えでとらえています。コーディネーションは神経系、情報系だから常に行うものということなのです。ですから、コーディネーションは疲労回復でも重要だということです。本当に疲れた、というときにこそ力を発揮できると。実際、元日本代表の豊田陽平選手（現、ツエーゲン金沢）に試してもらった実践があり、効果が確認されています。

また、プレ・ゴールデンエイジの話から逸れてしまうかもしれませんが、筋力やパワーをつけても、それをどう使うかなのです。

以前、大学陸上競技の選抜合宿で、武井壮さん（元十種競技選手）を講師にお呼びした際の話です。武井さんは、ご存知の通り、大学時代に十種競技で日本一になった方です。以前から「身体の使い方には自信がある」とおっしゃっていたものですから、お願いしました。

話の中で「テニスボールをジャグリングしてみてください」というのです。さらに「これができるようになると、足が速くなりますよ」と。今考えると、これこそコーディネーショントレーニングなんだと思うんですよ。

というのは、ボールを投げる力加減と腕の角度など、見えていないところで一連の動きを感覚的にわかると、確かに足の動きに活きるんですよ。頭でわかっている、やっていない動きというのは多いものです。そう考えると、今の日本代表選手クラスでもまだまだ伸びしろがあると言ってもいいでしょう。

そこで身体をどれだけ動かせるかという「器」を大きくするためにも、プレ・ゴールデンエイジの段階で「できるようになる」ということは大事なことです。大人になってから、一輪車に乗るのは難しいじゃないですか。それが自転車は一度乗れるようになったら、その感覚は続きます。適時性を見定めて、コーディネーショントレーニングを促していきたいものです。

指導者の皆さんには、プレ・ゴールデンエイジの子どもたちがへとへとに疲れるまで遊べる環境を作ってほしいのです。

—そこで「眼」だと思うのです。指導者が何をどう見るのかという「眼」が大事になってくると思うのです。

沼澤 基本的には選手を評価するときは、パフォーマンスのみならず、例えば、強いボールを蹴ることができるかどうか。ちなみに、陸上だと早熟な選手は、たいていどこかで成長が止まります。

今、「眼」とおっしゃいましたが、「動きがいいよね」というのが大きなポイントでしょうか。陸上だと、手と足の協調性とかリズムを見ます。サッカーだと、切り替えが早い、すばしっこく走る、ポジショニングがいい……。そんなサッカー特有な「眼」、ポイントをいくつか挙げて評価していけば、いわゆる「取りこぼし」はなくなると思



います。
山崎 Jクラブのスクールで経験したのですが、一度癖がつくと、12歳だとなかなか修正できないんですね。「自由にやっていよ」ではなく、ファクターを提示して指導したほうが良いなと思ったことがあります。

沼澤 膝を緩める、伸ばすという切り替えができるよう指導できればいいです

ね。そういえばレッズ時代、ある選手はボールを持たないと腰を高くして、いつでも走れるような準備をしていましたが、逆にボールを持っているときは腰を低くして、いろいろな方向へと動くことできていました。切り替えができていました。しかし、ある選手は本当に足が速い選手でしたが、常に腰を高くしているの、切り替えができませんでした。

前述した小粥さんは「日本人らしい、しなやかさと持久力をどう併せ持つかが大きなテーマだ」と言っています。

遊びの重要性。そしてプレ・ゴールデンエイジへのアプローチ

山崎 しなやかさの面では心配ですね。どのカテゴリーでの試合を観ていても、パチパチ戦う場面は多いのですが、スッとすり抜けていく場面が少なく感じますね。

柏 ということを考えて、里山へ行って遊ぶという経験ができないのであれば、小学校での体育の授業は大事ですね。ここでいろいろなスポーツを体験させなければなりません。

山崎 キッズの指導現場を変えていくことを検討しなければなりませんね。キッズフェスティバルで啓蒙するとか、いろいろと方策を考えたいと思います。

沼澤 例えば、JFAアカデミー福島では、選手たちに逆立ちをさせました。最初は上半身で自分の体を支えられないんですね。それでも

週1回を三か月続けたら、5メートルくらい歩けるようになりました。心身を育てるには、サッカーだけではなく、他の競技も遊びも必要なのです。ですから、やはり「眼」ですね。指導者の皆さんには、子どもたちの評価の方法を考えてほしいのです。

これまた提案ですが、陸上ですと、走りの分解写真から「どこがおかしいと思いますか？」と投げかけ、正しい評価をするよう促しています。サッカーでも、パスのもらい方や動きの切り替えなどの分解写真から、落とし込めるようになるのではないのでしょうか。

—やはり「眼」ですね。となると、JFAの指導者ライセンスとは別に、育成事業としての指導者向けの研修会が必要になりますね。沼澤さんと同じような「眼」を持つ指導者の育成が急務です。

山崎 まずは、リフレッシュ講習会のテーマにするのはどうでしょうか。PHVの普及もしたいものです。

柏 そうですね、リフレッシュ講習会で始めることが一番、早いかもしれません。沼澤さん、ぜひ講師として、お願いできますでしょうか。

沼澤 ありがとうございます。こちらからもぜひ、お願いします。

山崎 私の大学の同級生ですから大丈夫ですよ。よろしく願います。

—ぜひ技術委員会として、計画を立ててください。ただ、JFAとしても「JFA フィジカルフィットネスライセンス」がスタートしました。まずはフィジカルC級から、B級、A級と続くようですね。

沼澤 詳細は、JFAのホームページ(https://www.jfa.jp/coach/physical_project/)をご覧ください。フィジカルC級は4日間の講義です。ランニングとコーディネーションのトレーニングもカリキュラムの中に入っています。多くの指導者に知識を持っていただけると幸いです。

—最後になりますが、来年度からは、立教大学の新座キャンパスで「スポーツウエルネス学部」が新設されるとのこと。楽しみにしておりますし、SFAとも様々な協働をお願いできればありがたいです。本日はありがとうございました。

沼澤秀雄 / 1963年山形県生まれ。

順天堂大学体育学部～同大学大学院(コーチ学)修了。

日本陸上競技連盟指導者養成委員会副委員長など要職を務める。

「第4回埼玉フットボールカンファレンス2022」開催

3月19日、熊谷市文化創造館さくらめいと太陽のホールにて、「第4回埼玉フットボールカンファレンス2022」が開催されました。

鈴木茂会長の挨拶から始まり、まずはJFAコース育成ダイレクターの影山雅永氏から「2020東京オリンピック男子サッカーU-23報告」がありました。メダルを獲得するために世界は何をしているのか、その潮流を伺うことができました。現状、海外でプレーする選手が増えてきたものの「自分のストロングプレーを生かした活躍ができていのかどうか」という投げかけは興味深く、チームの中で「気遣い」に走ってしまう日本人選手にもっと自立を求めていることが印象的でした。次にJFA 関東女子チーフの仲野浩氏からは、「女子サッカーの発展に向けて」。WEリーグの開幕で今後、日本の女子サッカーがどのように進んでいくのが示されました。

そして、今回のメインと言える、日本大学理工学部教授・東北大学名誉教授である北村勝朗氏による「心理学から見るサッカーのこ

ーチング」では、「優れた指導者は内省(振り返り)をしている」という話や、選手たちの「やる気スイッチ」をどうオンにさせるのか—「わくわくさせる」ための導入期、専門期、発展期と段階を追う具体例は非常にわかりやすいものでした。

最後に、新しくFAコーチに就任した山崎茂雄氏が登壇し、FAコーチの役割の説明がありました。参加された192名の指導者の皆さん、埼玉サッカーの発展に役立ててください。



影山 雅永氏



仲野 浩氏



北村 勝朗氏



山崎 茂雄氏

大会記録 ● 県内大会

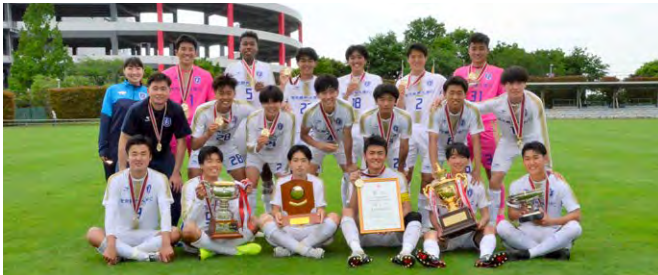
1種・社会人

2022年度 彩の国カップ第27回埼玉県サッカー選手権大会

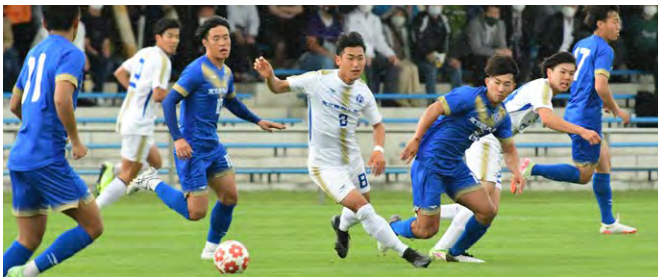
4月23日、5月7日 埼玉スタジアム第2グラウンド他



※優勝は東京国際大学FC(4年ぶり2度目)。東京国際大学FCは埼玉県代表として、「天皇杯 JFA 第102回全日本サッカー選手権大会」に出場。



優勝 東京国際大学 FC

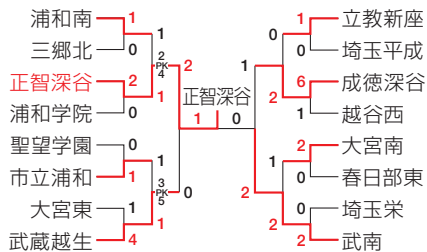


決勝 東京国際大学 FC vs 東京国際大学体育会サッカー部

2種・高体連

令和4年度 第65回 関東高校サッカー大会県予選

4月16日～30日 浦和駒場スタジアム他



※優勝した正智深谷は埼玉県第1代表として、準優勝の武南は第2代表として、関東高校サッカー大会に出場。



優勝 正智深谷



準優勝 武南

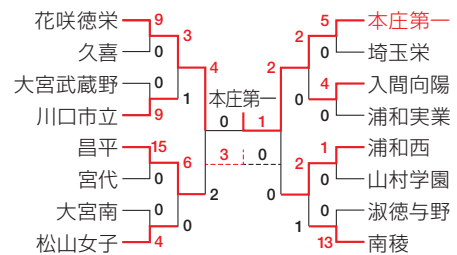


決勝 正智深谷 vs 武南

女子・高体連

令和4年度 学校総合体育大会

4月23日～5月14日 浦和駒場スタジアム他



※優勝した本庄第一は関東高校女子サッカー大会に出場。



優勝 本庄第一



決勝 本庄第一 vs 花咲徳栄

フットサル

JFA 第18回全日本大学フットサル大会埼玉県大会

5月21日～28日 くまがやドーム他

準決勝 東京国際大学体育会サッカー部 6-0 大東文化大学ディセット

決勝 城西大学体育会サッカー部 1-10 東京国際大学体育会サッカー部

JFA 第9回全日本U-18フットサル選手権大会埼玉県大会

5月7日～28日 くまがやドーム他

●予選リーグA

順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
1	IF Levante	6	2	0	0	15	1	14
2	浦和麗明高等学校	3	1	0	1	13	5	8
3	叡明高等学校フットサル部 B	0	0	0	2	2	24	-22

●予選リーグB

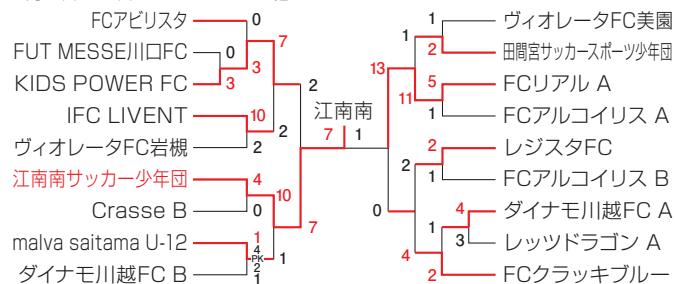
順位	チーム	勝点	勝	分	負	総得点	総失点	得失差
1	叡明高等学校フットサル部 A	3	1	0	0	3	0	3
2	山村国際高等学校	0	0	0	1	0	3	-3

●決勝トーナメント

準決勝 正智深谷高等学校 4-1 If Levante FC
 FFCエストレーラ 11-0 叡明高等学校フットサル部 A
 決勝 正智深谷高校 0-7 FFCエストレーラ

JFAバーモントカップ第32回全日本U-12フットサル選手権大会

4月9日~30日 くまがやドーム他



※優勝は江南南サッカー少年団

大会記録 ● 県外大会

2種・高体連

第65回関東高等学校サッカー大会

5月28日~30日

●Aグループ

1回戦 正智深谷 0-2 宇都宮短大附属

●Bグループ

1回戦 武南 3-2 韮崎
 2回戦 武南 0-3 前橋育英



1回戦 正智深谷 vs 宇都宮短大附属



1回戦 武南 vs 韮崎



2回戦 武南 vs 前橋育英

4種

J A全農杯全国小学生選抜サッカー IN 関東

●予選リーグ・Aパート

新座片山フットボールクラブ少年団 0-0 FC VALON(栃木県)
 Uスポーツクラブ(山梨県) 1-0 新座片山フットボールクラブ少年団
 新座片山フットボールクラブ少年団 1-5 横浜F・マリノスプライマリー

●予選リーグ・Dパート

レジスタFC 4-0 ともぞうサッカークラブ(栃木県)
 レジスタFC 2-0 ジェタリスト(群馬県)
 レジスタFC 3-0 東京ヴェルディジュニア

●決勝トーナメント

レジスタFC 0-2 柏レイソルU-12

※優勝は鹿島アントラーズつくばジュニア

女子

第11回関東高等学校女子サッカー大会

5月28日~30日

1回戦 本庄第一 1-2 鹿島学園



本庄第一 vs 鹿島学園

シニア

JFA 第21回 全日本O-50サッカー大会関東地区予選会

4月24日 群馬県

1回戦 FC浦和シニア 2-0 ウィットランドマスターズ(神奈川県)

●代表決定戦

商大クラブ50 2-2 FC浦和シニア (8PK 9)

※山梨マスターズ、FC浦和シニア、T・ドリームス50が本大会に出場する

JFA 第10回全日本O-40サッカー大会関東予選会

5月21日、22日 千葉県

●予選リーグA

SOL TODA 0-0 FC船橋
 SOL TODA 3-0 北群馬サッカークラブ
 SOL TODA 2-0 ヴェルフェシニア40

※SOL TODA は予選Aリーグ1位

●順位決定戦・決勝戦

SOL TODA 0-1 西湘Wings

※優勝は西湘Wings。SOL TODA は第2代表として全国大会出場

インフォメーション

C級ライセンス講習会予定 <https://www.saitamafa.or.jp/leader/class/>

第1コース	5/7、8、14、15、21、22、28、29	9:00～17:00	SFAフットボールセンター	終了
第2コース	7/3、9、10、16、17、18、23、24	9:00～17:00 (7/23は19時まで)	SFAフットボールセンター	終了
第3コース	7/30、31、8/6、7、8、13、14、20、21	14:00～21:00	SFAフットボールセンター	
第4コース	9/3、4、10、11、18、19、24、10/1	9:00～18:00	SFAフットボールセンター	
第5コース (女性限定コース)	10/1～11/26 (参加人数により講習会日数は変わります)	夜間限定	SFAフットボールセンター	
第6コース	2023年 1/7、8、14、15、21、28、2/4、5	9:00～17:00 (2/4は19時まで)	SFAフットボールセンター	
受講料/40,000円 (内訳/JFA 納付金 2,200円、教材費 12,100円、SFA 受講料 25,700円)				

D級ライセンス講習会予定 <https://www.saitamafa.or.jp/leader/class/>

第1コース	4/30、5/1	9:00～17:00	SFAフットボールセンター	終了
埼玉スタジアムコース	5/14、15	KICKOFFでご確認ください	埼玉スタジアム	終了
第2コース	6/4、5	9:00～18:00	SFAフットボールセンター	終了
第3コース	6/25、26	9:00～18:00	SFAフットボールセンター	終了
埼玉スタジアムコース	7/16、17	KICKOFFでご確認ください	埼玉スタジアム	終了
第4コース	8/27、28	9:00～18:00	SFAフットボールセンター	
第5コース	10/8、9	9:00～18:00	SFAフットボールセンター	
第6コース	12/3、4	9:00～18:00	SFAフットボールセンター	
第7コース	12/17、18	9:00～18:00	SFAフットボールセンター	
第8コース	2/4、5	9:00～18:00	SFAフットボールセンター	
受講料/15,000円 (内訳/JFA 納付金 1,100円、教材費 5,170円、SFA 受講料 8,730円)				

※お申込みは、KICKOFFからお願いいたします。

※各コースの初日 45 日前を目安に KICKOFF に掲載いたします。

※ KICKOFF……JFAホームページからKICKOFFのページへ行き、JFA IDを取得してください

【講習会に関する問い合わせ】技術委員会 指導者養成部会 (TEL:070-7417-0447)

【KICKOFF の操作方法、費用の支払い方法、JFA-ID のパスワード再発行等に関する問い合わせ】

JFA 登録サービスデスク (TEL:050-2018-1990)

JFA公認キッズリーダー養成講習会予定

第1コース/U-10コース	5/22	14:00～17:00	SFAフットボールセンター	終了
第2コース/ALLコース	7/3	10:00～17:00	SFAフットボールセンター	終了
第3コース/U-8コース	9/11	14:00～17:00	SFAフットボールセンター	
第4コース/ALLコース	10/23	10:00～17:00	SFAフットボールセンター	
第5コース/U-6コース	11/6	14:00～17:00	SFAフットボールセンター	
第6コース/U-10コース	2/23	14:00～17:00	SFAフットボールセンター	
第7コース/U-8コース	3/5	14:00～17:00	FAフットボールセンター	
受講料/4,000円 (第2コースと第4コースはALL【U-6,8,10】コースなので、7,000円)				

※お申込みは、KICKOFFからお願いいたします。

※ KICKOFF……JFAホームページからKICKOFFのページへ行き、JFA IDを取得してください

【講習会に関する問い合わせ】公益財団法人埼玉県サッカー協会 (TEL:048-834-2002)

「JFAキッズU-8サッカーフェスティバル2022 in 坂戸」開催

5月22日、前日の雨で開催が危ぶまれましたが、無事に「JFAキッズU-8サッカーフェスティバル2022 in 坂戸」を開催しました。午前、午後の部を合わせて、48チーム、434人もの子どもたちがサッカーを楽しんでくれました。今回、初めて女子チームの狭山女子FCが参加してくれました。技術的にも優れており、男の子たちに負けないサッカーを繰り広げてくれたのが印象的でした。

また、松山女子高校のサッカー部31名の皆さんに審判役員としてご協力をいただきました。積極的に子どもたちとコミュニケーションをしてくれたことで、大会そのものに活気をもたらしてくれました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。(4種キッズ担当・河野雅明)



編集後記

本号冒頭で紹介した「第4種リーグ戦」も含め、4月から各種別のリーグ戦が開幕し、公式大会も続々と開催されています。コロナ禍前に完全に戻るの難しいかもしれませんが、サッカーが日常に戻りつつあることを実感しています。今は梅雨空とにらめっこの毎日ですが、

突然の雷雨や悪天候に悩まされる時期。充分にお気を付けください。また感染症対策に暑熱対策…大会運営に関わる皆さまにはご苦労の絶えない状況ではありますが、安心安全な運営にご協力のほどお願い申し上げます。(藤田)